

被災から5年たった石巻・女川を旅して

5月の連休に予定されていた西宮医師会主催の長崎旅行が、熊本地震のため中止となった。その代わりに、私のかねてから希望であった、壊滅的な被害を受けた石巻市と女川町の訪問を計画した。ちょうど4月30日放送された、「命をつなぐ3000通のカード：ラジオ石巻」というNHKの番組をみて、5月2～3日に行くことを最終決断した。

東北新幹線で東京から仙台に向かう途中、海側に長い高压電線が張り巡らされていた。調べてみると、福島原子力発電からの東京への送電線であり、いかに東京が福島の電力を享受していたかを実感した。

石巻市駅に到着後、駅の観光案内所に行き、「石巻がどのように被災して、どのように復興されているのかをみたい」という私の旅の目的を説明すると、「復興町づくり情報交流館」を紹介された。駅から歩いて500mくらいのところに、目立たない小さな平屋の建物があり、震災当時の状況の写真、石巻市と太平洋沿岸および北上川との関係を示した地理などの提示があった。私が入館した直後に、団体客がこられ、担当の松川さんが説明されているのを一緒に拝聴した。どのように、津波が石巻をおそったか、どうやって近くの高台である“日和山”に逃げたか、そして、翌朝の火災はどうして起こったかなどの説明を受けた。そして多くの死亡者のうち、未だに見つからない人が多数いることもわかった。

とてつもない被害にあったにもかかわらず、ボランティアの助けに背中をおされてがんばっている人の写真が数十枚、パネルで掲示されていた。そのパネルには、それらの人々がどうやってここまで復興できたか。そして関与した多くの人々への感謝の言葉がつづられていた。パネルの人々がどのような思いをもたれて今日までこられたのかを聞きたくて、松川さんにそのうちの2人がおられる場所を紹介してもらった。

パネルのなかに登場されていた、亀山さんが経営する肉屋で牛タンを購入し、女性マスター経営のコーヒ店“むぎ”を訪問し、歓談することができた。

喫茶むぎでは、高齢の女性マスターがすばらしい笑顔でサイフォンを使って



コーヒをいれてくれた(図1)。

震

災当時、津波のあとでは、家の中がコーラタールを塗られたようで大変になったこと、それらを若いボランティアが片づけ、喫茶店の改修を手伝ってくれたこと、「ここでやめたら津波に負けたことになる」と思い、いまはなき腰が悪かった夫とともに喫茶店を再開したことなどをお聞きした。震災直後では、配給はカップ1杯の水のみで、食料はほとんどなく、少ない物をお互い分け合っていたという。救助物質がきたが、並んで待っているところへの割り込みや略奪もあったし、どろぼうもいた。

喫茶店におられた菅野さんの案内で、多くの人が避難した海拔60mくらいの日和山を歩いてみた。そこからみた沿岸部には、建物が全くたっていない地域があった。そこは、津波で壊滅状態となったあと、新しい条例では建物を建てられないのだと話された。頂上には、八重桜のとてもきれいな公園があった。

翌日、女川にいった。復興のシンボルである新しい女川駅は高台につくられており、海まですばらしい景色がみえ、両脇には店がならんでいた。

女川観光協会で語り部の話をきくことができた。海拔16m高台にある女川医療センター以外はすべて流されたのである。その敷地に「1000年後の命を守るために」という石碑(図2)が女川中学校卒業生の募金活動によって建



てられていた。この語り部、

伊藤さんは「震災がもしおこれば、家族でどこであうなどを決めていたのがよかった」と。備えの重要性を私たちに話された。

女川漁港はとっても活気があり、復興しているように思えた。震災直後には、魚を保管する冷蔵庫がなくなっただけでなく、カタールからおくられたという大型冷蔵庫の話も初めてきいた。とっても、心温まるいい話であった。近くにある女川原発に福島のような問題がおこれば、このあたりも汚染で生活できなくなるのだろうと思った。

語り部をしてくれた2人の女性は、ここまでどのような葛藤があったのだろうか。私が、知るよしもないが、その葛藤を乗り越えて、人の前でたんとと語れるには時間がかかったのだろうことは容易に想像できた。

震災当初では、私は現地を、特に福島原発の被害を体感したいと思っていた。しかし、広大な被災地の1カ所にいっても、全体像がわからないだろうし、土地勘がないのにひとりで旅するのは大変だろうと、思いこみ、現地にいっていなかった。しかし、今回、原発ではないが、壊滅的被害をうけて復興の道にある石巻、女川の一部と、ごく一部の人々と話すことができた。震災、復興の全体像ではないが、それなりの真実を実感した。

話しをすることができた多くの現地の方は、遠く離れた他県の間人が、関心をもって被災地に出かけて、状況を見てほしいと望んでいることがわかった。

未被災県の私たちは、現在の都会生活の中で、人と人のふれあいや絆を感じることは少ない。被災地の復興の途中経過をみるにつけ、震災という大変なことが起こった時、人間にとって、ふれあい、絆がどれだけ必要なのかを体感でき、それが未被災地の我々にも重要だと体感した。

すばらしい経験をさせていただいた、石巻、女川の人々に感謝すると同時に、次回は是非、福島原発の状況を見に行きたいと思っている。